

— 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。筆者は幼稚園の園長です。

子どもの世界にいると、いつも驚きや発見でいっぱいだ。私が幼稚園に入園、いや就任した入園式の時、こんなことがあった。年少児は初めての幼稚園に慣れず、そこら中で「ママー！」とか「やだー！」という叫び声や泣き声が聞こえていた。そういう私自身も園児たちとの触れ合いはほぼ初めてで内心はどう接してよいか①ドキドキしていた。

そんな時、入園したばかりの女の子が②何かを拾って私のところに駆け寄り、③目をまん丸にして「これ、何？」といって見せてくれた。それは一枚の桜の花びらだった。園庭の桜が満開だったので、花びらが落ちていても珍しくもないと思ったが、その子があまりに目を輝かせて驚いているので、「きれい、なんだろうね」と一緒に驚いていると、他の園児たちも集まってきて、「きれいな色！」「かわいい！」などと騒ぎはじめた。なかには「これは桜の花びらだよ」と分かっている子もいたが、はじめて桜の花びらを見る子どもにとっては、きつと宝物でも見つけたような気分だったのだろう。すると桜の花びらを持ってきてくれた子が、「これすごくきれいだから先生にあげるね」と言って、私にプレゼントしてくれたのだ。

桜の花は確かに美しいが、毎年当たり前に咲くと思っている大人の見方と、初めてその美しさを発見する子どもとで、その美しさはどう違って見えるのだろうか。

また、こんなこともあった。ある時、数人の園児が私の耳元に何かを持ってきて、「先生、ほら」と、カサカサと音をたてたのである。何かと思ったら、葉っぱや小枝をクルクルと回し、耳元でその音を聞いてケラケラと笑っているのだ。

大人である私なら、葉っぱは葉っぱ、枝は枝にしか見えないが、子どもはそれを一瞬にして④にしてしまう。

またある時、園庭の真ん中で園児が一人でピョンピョンと飛び跳ねていた。それも時折リズムが違うので不思議に思っていたら、幼稚園近くの建築中の家から聞こえてくるトンカチの「トン・ト・ト・トーン……」という音にあわせて飛び跳ねていたのである。

い。むしろ子ども以上に人生を深く味わって生きているじゃないか。でも、笑う回数となると、確かに大敗を認めざるを得ない。

その差の理由はいろいろ考えられるのかもしれないが、⑦一番大きな理由は、「いまこ」を生きている子どもと「いまこ」に生きられない大人の差からくるのだろう。幼児心理学では、子どもには時間という概念が希薄で、常に「今」だけを生きていると言われている。確かに自分の子どもの頃を思い出すと、過去や未来を考えず、とにかく一日が永遠のように長く感じられた。だから笑う時には他のことは一切考えず、今樂しければ今笑う。

ところが、大人になるにつれて思考力が身につくと、「次はこれしなきゃ」「こうしてはられない」と時間にとらわれて、今必要ではない別のことをあれこれ考えて深刻になってしまう。身体は「いまこ」にあっても、頭の中は先のことばかり。楽しいことがあっても笑えなくなってしまう。

(中略)

A 次の絵をご覧ください。私が幼稚園教員免許を取得するために学んだ教科書に載っていたものだ。今でも子どもと接するときには、常に念頭に置いている座右の書ならぬ、座右の絵になっている。

一体どんな絵かと言うと、ある幼稚園で三歳の子どもが書いた自画像だという。もし皆さんのご家庭に三歳の子供がいたとして、「これボクだよ」「ワタシだよ」と持ってきたらどんな反応を示すだろうか。

表面上は「うまく描けたね」と言うかもしれないが、内心は、「なぜ白目なの?」「顔はもつと丸いでしょ」「はやく絵画教室に通わせなきゃ」などと思うかもしれない。でも、担任の先生は、この子どもは何を伝えようとしているのかかと思ひ、直接尋ねてみたところ、「ぼく、おひるねしたよ」という思いがけない言葉が返ってきたという。つまり、昼寝をしているのだから、当然、目の玉はなくていいのである。さらにこの子どもは、「寝ているときは横向きになっているよ」と言ったそうだ。それだから体が横に伸びている。そしてまた「寝ているときはおしやべりしないから口を閉じてるよ」「口は閉じていても鼻でちゃんと息をしているから大丈夫だよ」と事細かく説明してくれたそうだ。

子どもが音楽を聴く時は、決して耳だけでは聴いていないのである。音に合わせて跳ねるかもしれない。手足をバタバタさせて地べたに転がるかもしれない。奇声を発するかもしれない。頭のとっぺんから足のつま先まで、全身で自由に表現する。聴いた音を聴いたままに受け入れる。全身が音楽になりきってしまうのである。だから音楽の上手い下手もない。

大人の場合、音楽というのは、先ずそれが誰の演奏か、何の楽器を使っているのか、技術はどうか、今流行っているのか、などの知識的な理解から入ろうとするが、子どもはそんなことは一切気にしない。彼らにとつて音楽とは、大人がつくった既成の楽器を演奏したり、童謡を歌ったりするだけではなく、身の周りで奏でられる音すべてが音楽であり、大人の音楽世界よりもずっとスケールが大きい。子どもの音楽世界は宇宙そのものであるといっても大げさではないように思う。

坐って腕組みしながら聴いて、隣席の人が拍手したのを見てあわてて拍手をするような大人と比べたら、⑤どちらのほうが音楽の楽しみを知っているだろうか? 子どもは文字通り「音」を「楽」しむという音楽の本質を理解しているのだ。

(中略)

登園する前の私は、「今日はあれやんなきゃ、これやんなきゃ」と積み重なった仕事で心配で憂鬱な気分になることもあるが、⑥子どもたちと遊ぶだけで頭がカラッポになり、自宅に戻るときには「なんにも……」といった心境になる。すると、なかなか無条件に人生が満たされているような気分になるから不思議だ。

どうやって計測したか知らないが、幼児期の子どもは一日に平均三〇〇回笑うらしい。それに対して大人は一日に平均一五回だという。ちなみに私はこれを書いている本日午後三時の時点でまだ一回だけ……。平均値まであと一四回かと思うと、ますます笑えなくなる。

それはともかく、三〇〇対一五というのが子どもと大人の世界を分ける差だ。この大きな開きは一体何だろう。大人の世界はそんなにも楽しみが少ないのだろうか。それとも大人になると感受性が鈍くなるのか。

いや、大人だって子ども以上に人生の楽しみはあるし、感受性だって枯れてはいない

そう言われれば、一見稚拙に見えるこの絵も、

⑧

様子をありありと描いた絵に見えてくる。もし大人の立場から「こう描きなさい」などと指導したら、いかに的外れなことだろうか。せつかくの表現力を大人の理解不足で台無しにしてしまいかねない。

教科書には、「この幼児は、顔という『もの』を描こうとしているのではなく、寝ていたという『こと』を表そうとして様々な工夫をしているのである」と説明がされている。

それでは逆に大人にはこのような絵は描けるだろうか? 大人の絵はつい知識や概念が先行してしまう。もし大人同士が集まって自分の似顔絵を描きましようということになったら、みな真つ先に鏡を見たり、写真を見たりして、似てるか似てないか、上手く描けるか描けないかということを気にしだすだろう。そういう意識で描かれた絵は、それがいかに自分に似せて描けたとしても所詮はコピー、ニセモノでしかない。その一方で、この子どもが描いた絵は、似てる似てない、上手い下手という次元を超えて、ありのままの真実である。ここに大人と子どもの世界の越えられない大きな壁がある。

⑨ピカソは「子どものように描くのに一生涯かかった」と言ったそうだ。ピカソの絵画活動とは、生涯をかけて子どもの世界を取り戻すことだったのかもしれない。

(阿 純章『迷子』のすすめ)

問一 ①とありますが、「ドキドキする」の意味を次から選びなさい。

ア はじめてのことで照れている

イ 心配でおそれおののいている

ウ 落ち着きを失ってあわてている

エ 不安と期待で胸が高鳴っている

問二 ②「何か」とありますが、それは何ですか。文中の語を用いて十五字以上二十字以内で答えなさい。

問三 ―③「目をまん丸にして」とありますが、このときの女の子についての説明として最も適切なものを次から選びなさい。

- ア あまりの楽しさにいきいきしている
- イ あまりの美しさに驚いている
- ウ あまりの不思議さに用心している
- エ あまりの騒がしさに緊張している
- オ あまりの珍しさに見入っている

問四 ④に二字の熟語を入れなさい。

問五 ―⑤「どちらのほうが音楽の楽しみを知っているだろう？」とありますが、子どもはどのように音楽を楽しみますか。子どもの音楽の楽しみ方を二種類、それぞれ本文中の具体例をあげて説明しなさい。

問六 ―⑥とありますが、「頭がカラッポになる」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 子どもの遊び方にあまり慣れていないので、体が疲れて気も抜けてしまう。
- イ 子どもが実に楽しそうに遊ぶので、自分がつまらなく思えて情けなくなる。
- ウ 子どもの遊び方が本当に自由なので、驚いて何のアイデアも浮かばなくなる。
- エ 子どもがとても夢中になって遊ぶので、日々の心配事を忘れてしまう。

一一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

わかりにくい言葉はへ へ内に意味を付記しました。

居場所がない、①身の置きどころがない、ひとりではじき出されている感じがする、まるでじぶんの存在が消え入る点になったみたい……そんな心細い思いが、人をしばしば蝕む。ずっと長くそんな不安な思いに沈み込んだままの人もいる。存在のこうした萎縮は、②人が「つくる」といういとなみから外れたところであるのではないかと、このところ思いはじめている。

人は生きるために、みなとともに生きるのびるために、土をAで米や豆や野菜を作り、それに使う道具を作り、身につける衣装を作り、物を運ぶ車や船を作り、雨風と夜露をしのぐ家を造ってきた。農作と工作、製作と造作。作ることは、生きることの基盤をなすいとなみの一つである。

だから幼稚園でも小学校でも、子どもにはまず「つくる」ことを教えてきた。料理を作ったり、土をBで何かの形にしたり、木を削って棒を作ったり、紙で箱を作ったり。くりかえすが、作ることは生きることの基本である。

ここで忘れてならないのは、そういう製作が単独の仕事ではなく、③他人の仕事とのネットワークのなかでなされてきたということである。たとえば包丁一つ作るのでも、鍛冶職人、刃付け職人、柄作り職人、そして最後に銘を切り、柄をつけ、包丁に仕上げる産地問屋というふうに、異なる人びとの繋がりがなくてはならない。

それにくわえて、いずれの職人も作るにあたって材料となる木や鉄がどのような性質をもっているかを知りつくしていないといけない。刃の当たるまな板の性質も刃を研ぐ砥石の性質も熟知していなければならぬ。さらにそれで野菜を切るのか肉を切るのか、肉でもどの部分を削ぐのかという用途もまたよく頭に入れておく必要がある。

こうした人の繋がり、④物との対話、用途の連なり、それらがあればこそ、わたしたちは、身を寄せられるもの、あるいは拠りどころとできるものの《たしかさ》に安らうことができる。⑤じぶんが生きる場の広がりを実感するようになるのだ。

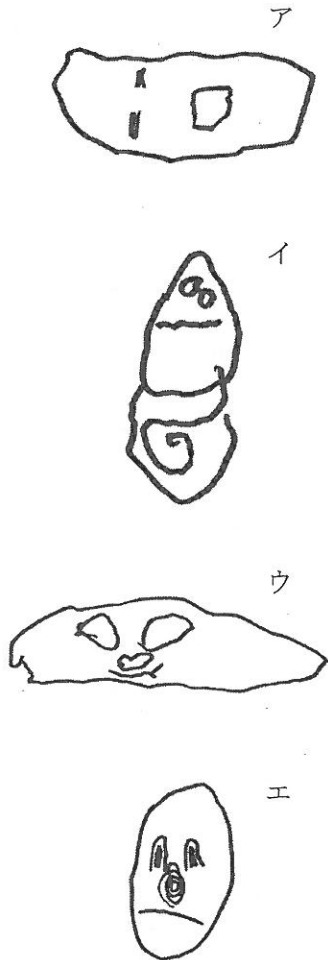
問七 ―⑦とありますが、「いまこ」を生きる子ども」の様子として、最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 明日素敵なペンを買ってもらうのを待てずに、棒きれでもよいので今地面に絵を描きたがる。
- イ 大人になったらとても忙しくなるので、今のうちに心ゆくまで遊んでおこうとする。
- ウ 運動会で一等賞をとるために、本当はやりたくない練習でも毎日一生懸命がんばる。
- エ 昨日弟におやつをあげてほめられたことがうれしかったので、今日は妹におやつをあげる。

問八 ⑧に、子どもの絵について説明する文を入れるとしたら、どのような文が入りますか。二十五字以上三十五字以内で書きなさい。

問九 ―⑨「子どもの絵のように描く」とありますが、大人と子どもはそれぞれどのように絵を描きますか。説明しなさい。

問十 ―A「次の絵」にあたるものを選びなさい。(出題の都合上、一部加工してあります。)



ところが、「文明」の進化とともに、人は「つくる」ことの手間を省いて、「つくられた」ものをCほうに、関心を移していった。家や車はもちろん、日用の道具も料理も、作るのではなくCようになった。製造と流通のシステムに「つくる」ことのほとんどを託すことで、人はホモ・フアーベル(作る人)から⑥「消費者」へと座を移していった。

便利に、快適になった。が、そうしたシステムに漫然とぶら下がっているうち、「つくる」という、生きる基本となる能力を損なってしまった。気がつけば、調理すること、工作することは⑦おろか、排泄物を処理することも、赤子を取り上げることも、遺体の清拭や埋葬も、みずからの手ではできなくなった、いのちを繋ぐために世代から世代へと伝えられてきた技をも損なってしまった。⑧そんな技の根絶やし状態をとことん思い知らされたのは、大震災でシステムが停止もしくは破綻したとき、つい6年前のことである。

一方で、「つくる」ことは「ものづくり」へと純化され、「創る」こととして神棚に上げられていった。匠の技として、道具が工芸品や美術品にまつりあげられる。用いられるはずのものが鑑賞されるものになった。道具は、用いられるものとして、人びとの繋がりが、物たちの連なりに根を生やしていったはずなのに。こうして⑨「つくる」ことがわたしたちから遠ざかっていった。

このことは「つかう」ことの痩せ細りをも招いた。道具は人がじっくり使いこなすものではなくなり、「つかう」はお金を使うことに縮こまっていった。

「つかう」というのは何かを手段として利用することではない。人は物だけでなく他の人も使うが、それは篡奪(さんだつ)が君主の位をうばい取るこや搾取(さくしゆ)が資本家が労働者の利益を不当にしばり取るこばかりではない。⑩おんぶしてもらったり、もたれさせてもらったりもする。

「つかう」とは「つきあい」からくるもの、つまり「付く」と「合う」の縮約形である。そして、道具を使うとは、道具の構造を受け容れることでそれにじわじわ馴染みつつ、みずからの可能性を外へと拡げてゆくことであり、そのかぎり「仕う」ことでもある。

さらに「つかう」には「遣う」の意味もある。人を遣わすとは、だれかをおのれ

の名代として送ること。この者の言葉はわたしの言葉と違っていただいてよいと。そういう信頼が「遣う」の核にある。そういう「つかう」の多層的な意味もまた「つくる」の萎縮とともに失われていったのではないだろうか。冒頭にあげた⑪個々人の存在の縮こまりも、おそらくこのことと無関係でない。

(鷺田清一『濃霧の中の方向感覚』)

問一 ― ①「身の置きどころがない」とありますが、「身の置きどころ」とはどのような場所ですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 逃げてかくれられる場所

イ 心や体が落ち着いていられる場所

ウ 存在の基本を見つけられる場所

エ 周りがよく見わたせる場所

問二 ― ②「人が「つくる」といういとなみから外れた」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 人がつくるといふ仕事を投げ出してしまう

イ 人がつくることの利点に関心がなくなる

ウ 人がつくることの影響を忘れてしまう

エ 人がつくるといふ行動をしなくなる

問三 ― A B にあてはまる動詞を解答欄に合せてひらがなで書きなさい。

問四 ― ③「他人の仕事とのネットワークのなかでなされてきた」とありますが、たとえば一冊の本ができあがるまでにどのような内容の仕事がありますか。「文章を書く仕事」以外に二つ書きなさい。

問八 ― ⑥「消費者」へと座を移していった」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 消費に気を取られて作ることを考えず、自然の恵みに目を向けない暮らしをするようになった。

イ 自分の欲望のままに消費するので、作っている他者への配慮に欠けた暮らしをするようになった。

ウ 作ることを専門家に任せて消費に専念し、自分の役割のみを考えて生活するようになった。

エ 自分では作れないものも手に入れて消費できる、便利で安楽な暮らしをするようになった。

オ いつでも消費する一方であるので、作ることの意味を失ったまま生活するようになった。

問九 ― ⑦「おろか」のここでの意味を次から選びなさい。

ア いいかげんにして イ いうまでもなくて

ウ ばかばかしくて エ とるにたらず

問十 ― ⑧「そんな技の根絶やし状態」とは、どのような状態のことですか。説明しなさい。

問十一 ― ⑨「つくる」ことがわたしたちから遠ざかっていった」とありますが、どういうことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 特別な技術を持つ人だけがものを作るようになったこと

イ 使うのではなく鑑賞するものばかり作られるようになったこと

ウ 職人たちが生産地からはなれてあちこちで作るようになったこと

エ 簡単に製品が手に入ることで作れるものを作らなくなったこと

問五 ― ④「物との対話」とは、どのようなことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 物を作る人が、ネットワークを通して材料の生産地をよく知ること

イ 物を作る人が、物のよさをひき出そうとみなでよく話し合うこと

ウ 物を作る人が、材料などに直接ふれてその性質をたしかめること

エ 物を作る人が、完成品の用途をきちんと使う人に伝えること

問六 ― ⑤「じぶんが生きる場の広がりを実感するようになる」とありますが、小学生の感想として、本文の流れに合わないものを次から二つ選びなさい。

ア 何か一つのものを作るにも、さまざまな職種の人が関わっていることを知りました。

イ 物を作るときには、できるだけたくさんのお店から材料を集めるのがいいと思います。

ウ 作る人が、自分の作ったものがどのように使われているのかまで考えているのに驚きました。

エ 職人が長い時間をかけてものの作り方を身につけてきたことに気づかされました。

オ せっかく物を作ったのなら、多くの人に知らせるようにするのがおもしろいと考えました。

問七 ― 二か所ある C に共通して入る適切な語を書きなさい。

問十二 ― ⑩「おんぶしてもらったり、もたれさせてもらったりもする」とありますが、他の人に対してどのような関係であると考えられますか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア どんな時も相手に甘えてしまう関係

イ 強いものが弱いものを助ける関係

ウ 何かを与える代わりに何かをもらう関係

エ 安心して相手を頼っている関係

問十三 ― ⑪「個々人の存在の縮こまり」と最も近い内容を持つものを次から選びなさい。

ア 自分以外の人や物と支え合ってお互いの存在を高めていくことができない状態。

イ 自分以外の人や物とふれあいながら自分が存在する世界を広げることができない状態。

ウ 自分以外の人や物と関わりながら自分の存在の意味を確かめることができない状態。

エ 自分以外の人や物と信じ合ってお互いの存在価値をみつけることができない状態。

三 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 今評判のお菓子のガンソはあの店だ。
- 2 近所の公園をサンサクする。
- 3 ハクガク多才な人。
- 4 教室に学級文庫をモウける。

